

武藤禎夫編

噺本大系

第十七卷

東京堂出版刊

編者略歴

大正十五年、東京に生まれる。東京大学国史学科卒業。朝日新聞社出版局勤務。出版校閲部次長、日本古典全書編集長を歴任。編著に『江戸小咄辞典』『落語三百題』『江戸小咄の比較研究』（東京堂出版）『昨日は今日の物語』（平凡社東洋文庫）『日本小咄集成』（共編、筑摩書房）『軽口咄本集』（古典文庫）など。

嚙本大系 第十七巻 定価七八〇〇円

昭和五四年四月二〇日 初版印刷

昭和五四年四月三〇日 初版発行

編 者 武 藤 禎 夫

発 行 者 岩 出 貞 夫

印 刷 所 株式会社平文社

製 本 所 協和製本株式会社

発 行 所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三十七(丁二〇)

電話 東京 三三—三七一 振替 東京 三三〇

凡 例

第十七巻には、絵入本の1として、安永・天明年間に出版された黄表紙仕立噺本を中心に紹介し、併せて明和年間の絵本形式噺本と、安永初期の仕形咄本を加えた二十五種を所収する。噺本は、文字で記される部分が大半で、口絵や挿絵を少し添えるにすぎなかったが、宝暦前後の上方板絵本類の流行、安永四、五年以後の江戸における黄表紙の全盛に伴い、咄と絵をあわせ楽しむ趣向が生じ、画工も噺本を手がけることが多くなった。その際、咄は新作はきわめて少なく、大方は既成笑話を再出させたので新味は薄い、佳話ぞろいであった。絵は咄に合わせて描かれたが、天明中頃からは、絵の部分も既刊の黄表紙などをそのまま使い、地の文の所に咄をはめこんで一書を作る安易な出版も見られた。いずれにしても、咄と絵を共に味わえるものとして当時も広く喜ばれたものであるが、全図を掲げることが困難のため、従来、紹介されることが少なかったので、絵入本としてまとめることにした。

この期のものは、利用された小咄自体が、簡潔な行文の安永初期の江戸小咄が多いので、原本の見開き丁を上に段に影印で示し、それに対応する活字を下段に記した。大部分はそのページに納まるようにしたが、長文のために前後のページに移ったものも若干ある。また、図中に絵詞のあるものは、咄の末尾に細字で添えた。表紙の題簽は掲載したが、底本に欠くものは書名を文字で示した。また、書名と刊年、作者・板元・書型・底本の所蔵文庫（架蔵本は省略）などを記した。書名は、内題・序題・題簽などによって記し、刊記のないものは序の年月を示した。江戸以外の板元は地名を上につした。

翻刻にあたっては、底本の忠実な活字化につとめると同時に、読み易いものにするよう努力した。その方針は、

概ね次の通りである。

1 本文の行移り・丁移りは、底本に従わなかった。ただし、底本の各丁の終りにあたる所に、版心の丁付により、丁数を括弧内に漢数字で示した。例えば、一丁の表と裏は（一オ）（一ウ）で示した。底本に丁数を欠くときは、洋数字で実丁数を記した。

2 句読点は、底本にとられず、私見によって、句読点・並列点を施した。

3 小文字や割り書きは、人名とか評語、ト書きなど、意味のある場合のみ再現し、他は本文に組みこんだ。歌句は理解しやすいように、改行した場合もある。

4 仮名について

イ 仮名の字体は、現行の平仮名・片仮名に統一した。「リ」「り」「ヤ」「や」「セ」「せ」などは判別しにくいため、概ね平仮名にした。また「江」「子」は「え」「ね・ネ」とした。ただし、当時平仮名の意識で使用されていた「ミ」「ハ」「ニ」は、読み易さを考え、そのまま残した。小文字の送り仮名は、概ね大きくした。

ロ 特殊な合字・連字は、現行の字体に改めた。（例、ノ↓シテ、ふ↓さま）

ハ 仮名遣いは混乱しているが、底本通りとし、歴史的仮名遣いには改めなかった。

ニ 本文の清濁は、底本では、当然濁点のあるべき所に、ない場合が多いが、私に加えることはせず、底本通りとした。ただし、濁点の位置のずれは正した。（例、おとがし↓おどかし、こどく↓こどく）

ホ 誤字・誤刻と思われる仮名も改めず、行間に（ママ）（○○カ）と注記した。

ヘ 衍字と考えられるものも削らず、（ママ）（○○衍）と注記した。

ト 振り仮名も底本の通りとし、削除したり補わなかった。「限り」などの衍字もそのままとし、「空」などとした。ただし、位置のずれは正した。（例、奈良↓奈良）

5 漢字について

イ 字体は原則として新字体を用い、新字体のないものは通行の旧字体を使った。ただし、固有名詞などで、底本のままにした場合もある。

ロ 異体字は、できる限り、新字体または通行の旧字体に改めた。(例、泰↓松、崑↓喜、姦↓秋、逮↓違、菴↓庵、賁↓煮)しかし、該当する字のない場合(例、姥、泪、嫫)は、そのまま残した。

ハ 宛字及び通行の久しい文字は、注記せずに残した。(例、百姓―百姓、有時―或時、内陳―内陣)ただし、極端なものは(ママ)とか、正しい字を()内に注記した。

ニ 特殊な草体・略体は、通行の文字に改めた。(例、い↓候、え↓也、ヒ↓被、ろ↓給、フ↓部、井↓菩薩、厂↓雁、广↓摩・磨)

ホ 誤字・誤刻と思われるものはそのままとし、注記を施した。

6 反復記号は、底本にしたがい、「┘」「└」「┐」「┌」の四種を使用した。

7 底本の虫損・汚損などで判読できぬ箇所は、同一板本で補えた場合は特に注記をせず、推定しうる場合は(○○カ)と注記し、全く不詳のものは、空白のままとした。

8 題名のない場合は、一行空きとして仮題は付さなかった。全篇無題の書は、検索の便を考え、各話の冒頭に、それぞれ洋数字で、通し番号を付した。

9 仕形咄本では、活字化にあたって、原本中の絵の部分は「┐」内に文字に書きかえ、咄として通ずるよう試みたが、表現にくいものは、単に「絵」などとした。

10 巻末に「所収書目解題」を付した。ここでは簡単な書誌と、諸本の異同や嗣足改題再板本との関連などを略記するにとどめた。

11 できる限り完本の紹介を心掛けたが、題簽の欠落したものや、一部汚損や不備のものも取上げた。また、「買言葉」は、正しい書名とは思われないが、確定する書名が不詳なので、所蔵図書館の目録通りの書名を、

括弧内に表記した。

底本に使用した原本は、主として公共の図書館・文庫や大学の研究室・図書館所蔵のものであるが、一部は架蔵本も用いた。完本を求め得ず、二、三の本を併せ用いた場合もあるが、その一々は記さなかった。

第十七巻で、原本の間覧と公刊を許可された図書館・研究室は次の通りである。記して深く謝意を表する。

東京大学国語研究室・同国文研究室・大東急記念文庫・国立国会図書館・東洋文庫・都立中央図書館加賀文庫
・香川大学図書館神原文庫

嘶本大系 第一期全八卷

(既刊)

*第一卷 寒川入道筆記 戲言養氣集 昨日は

今日の物語 わらいくさ 百物語 私可多咄

*第七卷

口ひやう金房

輕口あられ酒 露休置土産 輕口星

鉄炮 輕口福藏主 輕口出宝台 輕

口はなしとり 輕口機嫌袋 座狂は

なし 咲顔福の門 輕口独機嫌 輕口

蓬萊山 水打花 輕口もらいゑくぼ

輕口初売買 輕口福おかし 輕口春

ふくろ 輕口耳過宝 輕口わかえび

す 輕口臍順礼 輕口瓢金苗 輕口

笑布袋 輕口浮瓢箪 輕口腹太鼓

輕口福德利 輕口豊年遊 口合恵宝

袋 輕口東方朔 輕口扇的 輕口

はるの山 輕口片頬笑

*第四卷

秋の夜の友 囃物語 杉楊子 新竹

*第八卷

*第五卷

字喜藏主古今咄揃 当世輕口咄揃

当世手打笑 当世口まね笑 野鹿 武左

衛門口伝咄 鹿の巻筆 正直咄大鑑

*第六卷

枝珊瑚珠 露がはなし 遊小僧 初

音草嘶大鑑 露新輕口はなし 露の

平均三二〇頁
定価 各卷六八〇〇円

目次

凡例 三

絵本軽口福笑（明和五年正月刊）	三
絵本珍宝艸（明和頃刊）	一六
新軽口恵方宝（明和頃刊）	二七
新軽口初商ひ（明和頃刊）	三三
絵本初春咄の種（安永頃刊）	四三
春みやげ（安永三年正月序）	五一
和漢咄会（安永四年正月刊）	五九
春遊機嫌袋（安永四年正月刊）	六三
はなし亀（安永四年刊）	七四
今様咄（安永四年頃刊）	八六
書集津盛噺（安永五年刊）	一五
頓作万八噺（安永五年頃刊）	一六
目次	一

〔買言葉〕（安永六年頃刊）……………一八〇

青楼吉原咄（安永七年十一月序）……………一九二

自在餅（安永末年頃刊）……………三三三

富久和佳志（安永末年頃刊）……………三三三

笑上戸（天明四年刊）……………三三五

徳治伝（天明七年刊）……………三三七

下司の智恵（天明八年刊）……………三三九

百福茶大年咄（天明九年正月序）……………三七二

新米牽頭持（天明九年刊）……………二七

炉開嚙口切（天明九年刊）……………二九

比文谷嚙（天明九年刊）……………三一

かたいはなし（天明九年刊）……………三八

春の伽（天明頃刊）……………三九

所収書目解題 三四一

噺 本 大 系

第十七卷
（絵入本）

絵本軽口福笑
〔序題〕

明和五年正月刊

義笑作・臥仙序

京 菱屋治兵衛板

半紙本二卷合一冊

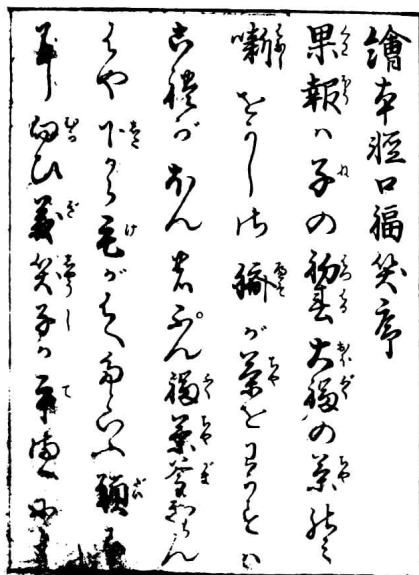
国立国会図書館蔵

絵本軽口福笑序

果報ハ子の初春、大福の茶のミ嘶をかし。御臍が茶をわかすハ、これがほんのぶん福茶釜ならん。はや下から毛がはへたといふ題すに向ひ、義笑子か手まへにて〔序才〕書たてし軽口の今むかし、あまり茶に福あり、笑ふ門に福来ると、軽口福笑ひと号く

戊子初春

臥仙題 匣〔序ウ〕



絵本軽口福笑



土をく——煙の今ひう
 けりあゝ後りあゝ内り後
 来ふく煙口福笑ひと号く

戌子初来

仙題



1 日比酒すぎなおやち有しが、有とき友達来り、はなし
 してあるうち、女房、さかづき、てうし持出、さゝ一つ、
 あがりませといひけれハ、おやち、肝のつぶれたるかほに
 て、酒をのミはじめ、客をもてなし、さて客かへりて、女
 房にいひけるハ、今の酒ハどふしてとゝのへしぞと尋けれ
 ハ、女ぼうのいふ様、されハこなさまの友だち、久しぶり
 にて見えしに、愛そがなさに、わたしが髪を半分かもじに
 売、それで酒をとゝのへましたといへバ、ていしゆおとろ
 き、さて／＼貞心なわろじやと、つふりを見て、こりや、
 も一度のが有といはれた(上一才)



2 旅の僧、かみゆひのどこへ来て、さかやきをすらしけれハ、髭をのこしてすらす。かのぼうず、ひげをなで、此ひげをすつて下されといへハ、此中やつこのひげをすつて、大きにめいわくいたしたといふてすらす。せり合いる所へ、おやぢ来り、なむ三、今度ハやつこを坊主にしたさふな（上一ウ）

3 りちきなるおやぢ、むすこに尋けるハ、やうずとハ何をいふと尋けれハ、やうずとハ南より吹風てこさる。此風ハ物にあたりてわるい風、人にもどく。魚ハたちまちくさりますといへバ、下より、きやくのぼりてつきける。ていしゆ出むかひ、これハ御のぼりて御ざります。まつ御そくさいて、おめでたうござりますとあいさつすれハ、されハ此度ハ南風に出合、なんぎいたしたといへハ、さてハ、さかながくさりましたかといはれた（上二ウ）



4 遠国より座頭ども、官あがりに大勢つれたち通りけれ
ハ、子ども、あまた遊び居たりけるか、一人の子申ハ、い
かゝるざとうかなといへバ、座頭申ハ、ゆふべの雨てはへた
ハといひければ、中にもこざかしき子が申ハ、目もなふて、
どふしてはへたぞといふた（上二ウ）

5 有人、久しぶりにて出合、是ハ御法体なされましたか。
掇法名ハ何と申ます。宗円と申ますといへハ、宗ハむね、
えんハ丸いてこざるかといへハ、いや、円ハ板じやといは
れけれハ、是ハふしきな字でござると笑ふてかへりし。跡
にてむす子きのどくがり、おやぢ殿。しらずハしらぬて済
事。あんハ板とハ何でござるとしかれば、何をぬかす。こ
ちのあんハ竹あんじやゆへ、丸いハしつて居れとも、ぐハ
いふんを思ふて、あんハいたじやといふた（上三オ）



絵本軽口福笑

6 大坂より京へのほり船、乗合たがひに咄し合中に、すまふとりのはなし出て、大山二郎右衛門ハせい六尺一寸有たといへハ、いや、相引も六尺二寸あつたと、とり／＼はなしして、とかく町にハ其やうな人ハないといへバ、わきよりそさうな男、わたくしがおやどもハ、六尺ござります。それハすまふにても出やしやるかといへバ、いや、あしやのりものかきでござるといふた（上三ウ）

7 まはりどをな箱屋のおやぢ、風のふくをよろこび、かゝ。商売^{しやうばい}がはやるそ。酒かふてこいといへハ、それハとふしていそかしいぞととへハ、はて、此風て人の目^めへほこりが入と、目をわづらふので、さミせんを習ふによつて、さみせん^{なち}の筈^{はこ}が大ふんうれるといはれた（上四オ）